



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | アイヌの古代風俗の研究に就て                                                                    |
| Author(s)        | 河野, 常吉                                                                            |
| Citation         | 札幌博物学会会報, 6(1), 38-42                                                             |
| Issue Date       | 1915-12-01                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/61250">https://hdl.handle.net/2115/61250</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | Vol.6No.1_006.pdf                                                                 |



# アイヌの古代風俗の研究に就て

河 野 常 吉

---

## ON THE METHOD OF RESEARCHES ON THE ANCIENT CUSTOMS OF THE AINO.

TSUNEKICHI KŌNO.

---

何れの人種に對しても其過去の風俗を調査せんとするに當りては、第一其現代の風俗を視察し、第二現代人の語る所を聞取ること固より必要なりと雖も、之に據りて輕々古代を推測論斷せんとするは極めて危険なることなり。何となれば風俗は長き間には著しく變化するものにして其變化は到底現代人の能く知悉し得る所にあらざればなり。試に現に中等教育を受けつゝある我が子弟に向つて我が父の時代の風俗を問はば如何、明瞭に答へ得る者幾人かある、其間相距る僅に數十年に過ぎずと雖も士族の佩刀は全く廢せられ、頭髮の貌は婦女の一部分を除くの外は毫も舊態を留めず、帽子は新に西洋のものを模倣し、衣服にも袴の廢するあり洋服の加はるあり、履物にも雪駄廢れ洋靴行はれし等變化少なからず。其他冠婚葬祭より年中行事に至るまで皆多少の變化を見ざるなし、子弟の之を知悉せざるは當然と謂ふべし。況んや五百年の昔をや、況んや千年以前の昔をや。幸に専門學者等の攻究によりて或る程度までは之を知るを得ると雖も古代の風俗の如き尙明瞭ならざるもの甚だ多し。學者にあらざる普通人に至りては殆んど全く之を知らずといふも可なり。文明の域にある我等が我等の祖先に對してすら斯くの如し。然るに今他の未開人種に向つて其古代の風俗を知らんとす、其困雜推して知るべきにあらずや。予は今北海道にあるを以て茲にアイヌの古代風俗の研究に就きて聊か述る所あらんとす。

今日アイヌの風俗を研究する人に二種あり、(甲)は學術的に研究せんとする人、(乙)は一時の物好きに之を爲す人にして何れもアイヌの固有風俗を知る

に苦心せり。然かもアイヌの風俗の變化したることは大和人種の風俗の變化したるに比すべし。而してアイヌには文字なく記録なきを以て其過去を知ること極めて困難なるのみならず、遺跡遺物の調査も未だ十分ならざれば新に之を爲こと容易ならず、是に於て多くの研究者は現代の風俗を視察し現代アイヌの語る所を聞き、之に手に入り易き數種の書籍を參考して研究し、其得る所を以てアイヌの固有風俗の如く考へ、終には之を以て古代の風俗をも論斷せんとするの傾を生ぜり。一時物好きに調査する人は之を措き、學術的に研究する人にして尙往々此弊を免れざるものあり。彼の無稽なるコロボツクル説の一時勢力を得て世を風靡したる如きも全く之が爲めなり。

アイヌの固有風俗といふ言葉は屢々聞く所なれども、此語の意義は甚だ漠然たるものなり。多くの人は近年他人種の感化によりて變化したる風俗の外は之を固有の風俗と云ひて、祖先より傳來して渝らざる風俗なりと考ふるものゝ如くなれども、アイヌは其前に於ても他人種の感化により若しくは其他種々の事情によりて風俗を變化したることあるや疑なし。されば固有の風俗と信じたるものゝ内にも固有の風俗にあらざるもの亦必ず少なからざるべし。予は普通にいふ固有風俗なる語の甚だ好ましからざるを信ずるものなり。今左に二三の例を擧げて古代風俗の研究の容易ならざる一斑を證せんとす。

(第一例) アイヌの髮容 アイヌは現時散髮なるのみならず其語る所に據れば昔時も結髮したることなし。本年四月の人類學雜誌にアイヌ通なる吉田巖君が「男女とも大昔から被髮で頭上に結ぶ事は無かつた」と書かれしも尤なり。予は先年此事につきて調査したる事ありしに、秦檜丸(即ち村上島之丞)の蝦夷島奇觀に寛政十年今の渡島國上磯郡當別村より掘出したる土偶の圖を掲げ之に解説を加へたり、其解説中に曰く、

蝦夷子なければ神に祈りて子を生ずれば、生長の後髪を切らず、三組にし垂れ置ぬ、名てカモイヲドヒといふ、ムカワ夷ホインカル、クヌイ夷ベ、レケレ神髪なり、此外所々にあり。按るに是太古の容と思はる、上古斷裁の器なきときは亂垂となるを厭ひ三ツ組にせしなるべし。

由是觀之、百年前までは神に祈りて生れし者は生長の後髪を結びし習慣ありしこと明かなり。さればアイヌに古來全く結髪の例なしと謂ふこと能はざるべし、尙其以前に溯らば如何。日本書紀景行天皇の條には男女推結文身、爲人勇悍、是總曰蝦夷とあり、推結の二字は「かみをあげ」とも「かみをかうぶり」とも讀ませて判然せざれども、「かみをあげ」といふときは結髪なり。兎に角古代の髪容は輕々斷言すること能はざるべし。

本年六月の人類學雜誌に、鹽田弓吉君は、上川より出たる一土偶が結髪せる事を記されて予は面白く拜見せり。其土偶の製作者がアイヌなりや他の人種なりやは尙研究の上にあらざれば知る事能はずと雖も、其研究上にもアイヌが古昔結髪したる例ありしや否やと云ふことが一の必要資料たり。しかも其髪容は遺憾ながら未だ明瞭ならざるなり。

(第二例) アイヌの入墨 アイヌの入墨は現今婦女の口邊と手とに限ると雖も過去も然るべしと思ふべからず。昔時は稀に頬にも入墨したるものあることは天明八年古河辰の東遊雜記によりて知るべし。尙男子も入墨したる例あり、文化五年著述の渡島筆記には、「氣をたのむもの自ら其額に黥す」と記せり。又明治二十二三年頃北海道廳屬永田方正氏の調査によれば、厚岸アイヌ太田紋助曰く

男が手に入墨するは弓を射て熊に中る爲なり、幣を建て神に祈り右手に  
 (弓矢)を入墨す。

石狩アイヌ琴似又一郎曰く

男子は右手にのみ入墨す、是弓矢に巧ならんが爲なり。

小樽土人は唇傍に入墨せしもの多くありし、是は能辨を欲する爲に入墨せしと聞く。

右等の例を見れば昔時は種々の入墨をなせしことあるを知るべし。尙一層古代に溯らば如何、日本書紀に文身とあるを見れば男子も一般に文身せしやも知るべからず。

(第三例) 入墨に使用せし刃物 入墨の事を言ひたれば、序てに入墨に使

用せし刃物に就いて言はんに、其刃物<sup>マキ</sup>は現今小刀若しくは剃刀を用ふと雖も、彼等が斯かる金屬製の利器を得る能はざりし古代は如何、今日のアイヌ（北千島アイヌを除く）は皆其祖先が石器を使用せしことなしを斷言しつつあり。されど蝦夷島奇觀には

ネモロ酋長シヨンコ云、古此島に刀子なき頃は石を碎き其利き片々を刃物となして用ひしとなん。一種アジ<sup>○黒曜石</sup>といふ黒玉石あり、利き事刃の如し、鐵石にもあり。今も深山に住む夷は石刀を用ひて切斷の器とせり。とあり、其他諸方面よりの研究によれば往古は石製の刃物を使用せしこと殆んど疑なきものゝ如し。而して近年ジョンバチエラー氏が十勝に於て入墨を指してアンチピリ（黒曜石の疵の義）と云ひし古語の残り居るを發見せられたるにより、昔時黒曜石の破片を以て傷つけて入墨したること最も明瞭なるに至れり。

（第四例） アイヌの衣服 アイヌの衣服の内其人種の自ら製作せしものにして今日着用するはアツシなりと雖も、昔時は多く獸皮を用ひたり、日本書紀に衣<sup>イ</sup>毛と云ふは即ち是なり。其他昔時の衣服の中には蕁麻<sup>イラクサ</sup>（蝦夷語アイ及びモーセの二種あり）の纖維にて織りたるイタラツペあり。鳥皮にて作りたるラブリあり。魚皮にて作りたるアクミあり、草にて作りたるケラあり、此等是一部のアイヌが製作して使用したるに過ぎざるべしと雖も兎に角彼等の衣服たりしものなり。然かも今日之を知る人甚だ多からず。而してアツシを發明して使用せし年代は全く不明に屬せり。

アイヌの古代の衣服に裳ありしや否や、之を調査せしが不明なり。<sup>ユウカラ</sup>古謡を見ればホシとて脚半の如きものを着けたることあるは明かなるも、裳を用ひし證跡は予未だ之を見ず。或る蝦夷風俗圖（書名を記せず）にエリモクルと云ふ軍師の容貌を描きたるに下肢に袴の如きものを穿ち居り、圖解には「頭巾は竹<sup>コンジ</sup>にて編み葡萄皮を毛となし<sup>アイヨツヘ</sup>鎧は竹にて細繩を以てつなぐと云ふ、其上に着たるはホクユクウル<sup>○熊皮義</sup>と申して熊の皮なり」など記しありたり。蝦夷の風俗を知りし人の書きしものゝ如く思はるゝと雖も、單に之に據りて袴の如きものを着用せりとまでは信ずる能はず。尙ほ研究を要すべきものなり。

以上は數例を挙げしに過ぎずと雖も、亦以てアイヌの古代風俗の調査の困難なる一斑を察するに足らん。若し輕々調査して論斷せん歟、必ず錯誤を生ずべし。依て更に調査上注意すべき件々を記して参考に供せん。

(一) 今日普通のアイヌに就きて過去の風俗を調査せば必ず誤りを生ずる恐あり。正直にして物識りたる老アイヌに就いて膽長に聞取るべし。

(二) アイヌも地方によりて多少風俗を異にし、口碑も亦同じからざるものあれば、成るべく廣く各地を調査するを要す。

(三) アイヌ語を學ばば調査上甚だ便利なるべし。予が如きはアイヌ語の素養なきを以て常に不便を感じつゝあるものなり。

(四) アイヌには文字なく、其記録は皆他人種殊に大和人種の手に成りしものにて、其内には今日アイヌの知らざる有益の記事少なからざれば、普く之を調査すること肝要なり。有りふれたる數種の書籍を讀みしのみにて安心すること勿れ。

(五) 遺跡遺物を成るべく廣く調査すべし。遺物を掘る場合の如き、自ら鍬を取らば遺物を比較的完全に獲ると共に、其存在の状態を知るを得て大に裨益する所あらん。

